

P1-076

噴火災害に関連した子どもの健康への影響と対策に関する文献検討

川島 雅子、久保 恭子、宍戸 路佳

神奈川工科大学 看護学部 看護学科

【目的】

日本は世界有数の火山大国であり、公表されている活火山110のうち47は火山防災のために監視・観測体制の充実等が必要な火山である。近年も、御嶽山、箱根山、阿蘇山、桜島などで噴火が相次いでいる。そのため、噴火災害が子どもの健康に与える影響と対策についての研究動向を明らかにすることを目的とした。

【方法】

検索方法：医学中央雑誌web版にて、キーワードは「噴火」「降灰」「火山ガス」と「健康」「看護」「子ども／小児」を組み合わせ、原著論文を検索し、73件を選出した。分析方法：73件の文献を概観し、「子どもの健康への影響」「健康被害防止対策」の視点から分析した。

【結果】

検索できた文献73件は、呼吸器系への影響27件、精神的問題への影響18件、支援活動・支援体制等28件があり、子どもの健康への影響に言及した文献は8件と少なかった。子どもの健康への影響では、桜島噴火時の降灰が学童の健康に一時的に影響を与えていることが明らかにされている。雲仙普賢岳噴火では、噴火後には屋外活動の減少や生活時間の変化から風邪を引き易く、火山噴出物に由来した呼吸器系の自覚症状が高く、学校や家庭の避難で増強されていた。そして、子どもの気管支喘息の悪化には小学校の噴火口からの距離と被災後の家族成員の変化が関連していた。また、硫酸系火山ガスの放出が続いた三宅島噴火の帰島後の調査では、火山ガス濃度が比較的高い地域では眼や皮膚の痛みなど自覚症状の有訴率が高く、呼吸器系疾患の既往等のある高感受性者では、%FVC、%FEV1に低下が認められ、火山ガスによる呼吸機能発達への影響が示唆されている。

【考察】

噴火による子どもの健康への影響に関する研究は、降灰や火山ガスを要因とした呼吸器系への影響の実態調査であった。火山噴火は人命に甚大な被害をもたらすだけでなく、噴火に特徴的な降灰や火山ガスは呼吸器系の健康に影響し、予備力の低い子どもではその影響が大きいことが懸念される。しかし、健康被害防止対策に関する研究は検索できなかった。また、子どもの精神的問題への影響に関する調査も見当たらなかった。しかし、気管支喘息の悪化や呼吸器系の自覚症状の高まりに学校や家庭の避難や家族成員の変化が関連していたことから、避難生活による子どもの精神面への影響の可能性も伺える。さらに、噴火災害時の子どもの為の健康被害防止対策について検討することが課題と考える。

P1-077

救急搬送で入院した子どもの母親の体験

山本 侑子¹、澤井 俊宏²、白坂 真紀¹、桑田 弘美¹

¹滋賀医科大学 医学部 看護学科、
²滋賀医科大学 医学部 小児科学講座

【目的】

本研究は、救急搬送にて入院した子どもの母親はどのような気持であったのか、家族は何を希望していたのかなど、母親の体験を明らかにすることを目的としている。

【方法】

1. 研究デザイン…質的記述的研究 2. 研究協力者…救急搬送された子どもの母親で、かつ子どもの状態が改善し退院の見込みがある者5名。3. データ収集方法…母親の気持ちが落ち着いた時期に、研究への同意が得られた協力者に対して、インタビューガイドを用いて半構成的面接を行い、録音した内容を起こした逐語録をデータとした。4. データ分析方法…逐語録を精読し、救急搬送時の体験に関する内容をコード化し、類似性に沿ってカテゴリー化した。質的研究者のスーパーバイズを受け、メンバーチェックを行い、信頼性を高めた。5. 倫理的配慮…滋賀医科大学医学部倫理委員会へ研究計画書を提出し、承認された後、研究協力者に研究の内容と人権擁護等の内容について文書を用いて説明し、同意を得た。

【結果】

研究協力者の子どもは男児1人、女児4人、平均年齢は7.4歳、消化器疾患1人、腎疾患3人、悪性腫瘍1人であった。救急搬送で入院した子どもの母親の体験として、177コード、37サブカテゴリー、7カテゴリーが抽出された。救急搬送で入院した子どもの母親は、最初は[病気を軽症と楽観視]していたが、時間の経過とともに[子どもの顕著な症状悪化を異常と認識]するようになり、[病気を詳しく知らないことに不安]を持った。しかし、[看護師の思慮深い気遣いに満足]し、[病棟スタッフの状況に応じた丁寧な対応を信頼]することで、[十分に安心・安楽な入院を希望]し、[他の家族が入院環境に順応できるよう気遣い]するという体験をしていることがわかった。

【考察】

母親は、おかしいと気づいても楽観的に見ようとする傾向があったが、救急搬送や入院となることで、母親は深刻な病気であると捉えていった。ある母親は、「終始どうしたらよいか分からず、先のことを考える余裕がなかった。」と述べ、混乱し、今思えば前兆があったのにと悔やんでいた。それでも、時間とともに変化する子どもの病状をよく観察しており、救急搬送時に、看護師がケアの内容を明確に示し、母子関係を重視した声掛けが母親に安心感をもたらし、医師からの病状説明で治療方針が分かると医療者に信頼を寄せるようになった。母親にとって見通しがつくことで不安の解消に繋がったと思われた。